

地名調査雑感

出内博都

この度縁あって、駅家町法成寺、万能倉地区の地名についての話をと頼まれ、古墳・条里制以来の古い土地なのでさぞ 由緒ある地名が多いだろうと期待したが、開発と発展のテンポの早い地域なので必ずしも特異な地名など少ないと云う感をいだいた。

倭名類聚抄、延喜式、古事類苑、国造本記、古事記などにある地名は限られており然もそれが現在のどこに当るか、さだかでないが、これについては既に先学が多くの説をなされているので重複をさげ、備南の一部にあつたと思われる古地名を一覧的に表示しておきます。

一、吉備王国の分解と地名

五世紀を中心とした吉備王国と大和王国の対立の結果、吉備本国の五分割（上道、三野、下道、香屋、笠臣）と周辺地域（主として備後）に国造の設置伝説（穴国造、品治国造）などがある。これより以来に品治郡の設置が考えられる。こうして一枚岩の吉備王国を分立させてその後、六世紀を中心に周辺部に直轄領屯倉を設置している。安閑記にみえる吉備後国の五屯倉（後月、多禰、来履、葉稚、河音）を置いている。これらは現在の備中国内に比定されているので問題がある。婀娜国の屯倉と

して騰殖・殖年部の二屯倉がみえる。（諸説があつて現地名比定できず

|| 広島県史参照)

二、倭名類聚抄を中心とした地名

大化改新（六四五年）以来数十年を費して律令体制が整備され国・郡（評）里の行政組織が一応できあがるが、備後国が正式にいつ成立したかも緻密にはいえない一応天武二年（六七三年）備後国司、白雉を神石郡に獲りて貢すとあるが種々問題もある（広島県史参照）。小さな地名はよくわからない。倭名抄は十世紀に源順が編集したものであり、備後十四郡のうち当地区にかゝわるものは深津郡（養老五年（七二一）安那郡よ分割）に中海、大野、大宅の三郷・品治郡（和銅二年（七〇九）三郷を芦田郡に割与）に品治・道、佐我、石茂、神田、服織の六郷・芦田郡（和銅二年（七〇九）甲奴郡新設により割与・品治郡の一部合併）に広谿・葦浦・都禰・葦田・駅家の五郷がみえている。これが現在のどこに比定されるかはいろいろ説の分れる処であるが、いずれにしても十世紀の書物である。そのなかに備後全部の郷が六五であるが、宝龜五年（七七四）頃の『律書残扁』には郷の数九〇、その下の里の数は一六一

とあり、最近問題となっている木簡（平城官跡）の中に神石郡加茂郷などという木簡もあり、長い間の変遷やその地名の起源をさぐるのは容易ではない。

倭名抄より少し早い時にできた靈異記（八二二年頃）には宝龜九年

（七七八）一二月備後の葦田郡の大山の里の人 品知牧人が正月の買物のため深津市に行く途中、觸骸を助ける語で觸骸が「吾は葦田の郡屋・穴國の郷の弟公で叔父に殺された」といきつを語る場があるがこゝに出る大山里とかヤナクニの里など現在の処不明であるが実際には多くの自然村落が出来つゝあつた事を物語っている。

三、地名のもとをさぐる

倭名抄の地名を考える場合、和銅六年（七一三）の風土記献上の事を頭におかねばならぬ。

続日本紀和銅五年五月の条に「畿内七道諸国郡郷名著好字、……」とあり口伝で伝わつた地名が漢字になり、然もそれが後世二字に限定される傾向がありこの為原義を損つて伝承し、逸話が生まれたものが多いと思われる。

風土記以来地名が変り、多くの自然村落が生じる歴史的節目として一応次のような段階が考えられ、現在でもその時々々の地名の痕跡が、化石か石器のように思わぬ処から発見される。地名の変遷、発生のプログラムを一応次のように設定することができる。

(1) 自然的地名

地名は社会的産物であり、二人以上の人間が共通の生活空間をもつ時

に必要なもので、初めはごく単純明解であつたと思われる。その場合大自然の偉大な力の中で小さな生活のいとなみをする人間にとって自然の状態は何にもまさる力で迫ってくるので自然から特定場所（地名）を生ずるのが最も多い。然もこの地名は限られた集団の中の了解で済むという個別性と、生活空間が広まり集団が大きくなつた時に必要な普遍性があり歴史の流れと共に変遷する事が多い。「今日は大町の稻刈りだ」と云う場合一反が一三枚にも分れている谷田の中の一番大きい田であることはその家族及び両隣位には通用する地名である。こうした地名の個性がより広い地域の地名になる普遍性は、人間の生活空間の広がり、生活形式の発展等多くの要素が働いている。そうして出来た地名も長い間の音便や方言の変化、慣習の変化でわからなくなるものが多い。漢字にまでわされたりして地名の解釈や語源さがしは一つのロマンではあるが、学問としては極めて頼りないものといえよう。気候、風土、植生、地形、水系等人間が一番最初に接する自然的地名が多いがこれらの中には、随分とわかりにくいものがある。現実に法成寺、万能倉地区の地名の中でそのいくつかを考えてみよう。

(2) 歴史的地名、宗教、民俗的地名

村の成立の歴史の過程で大きく地名が変つたと思われる節目は、(イ)班田制の施行と風土記の撰上という七〜八世紀の頃と思われるがこれについては倭名抄や延喜式などでその一部がうかがえるだけで自然の中できびしい生き方をしてる人間の血の通つた地名はなかなか浮んでこない。

(ロ)律令制がゆるみ班田制が崩れる時に一方では貴族・寺社による荒地の

囲いこみ式墾田地系の荘園が出来るのである。耕作・貢租引請人としての田堵の出現更に営みとして開発した私墾田の掌握を確実なものにするための名田制とそれを基盤とする寄進地系荘園ができる時期である。

人名の集落、ゲシ、クモンなどの荘官地名など或いは特定業務、信仰にまつわる免田などこの期のもは山間部にいくほど多く残っている。

(ハ)守護、地頭が設置され新しい自然村等ができる。一三世紀〜一四世紀も山城とか砦・館などを中心とした新しい地名が続々出てくる。中には自分の本貫地の地名を移すものなどある。

(ニ)この後秀吉、家康によって近世の統一的農村が編成される過程で荘園が解体し、小さな村が出現する。一地一作人主義から個々の土地の所在を明確化するためにおびたゞしい数の場所特定の地名が生ずる。

(ホ)明治の地租改正以降、市町村編成法や、地番制などによって随分面白い、無茶な地名もつけられた。更に戦後の開発で紅葉丘、五月丘、月見ヶ丘などまさに百花僚乱である。こうした中でせめて地図や記録の上だけにでも生活と共に歩んだ地名を残しておくことが必要なのではないのだろうか。

法成寺地区の地名

開発のテンポが早く、然も常に政治的経済的動きの中心に近い地域なのであまり古い地名はないが、元録一三年の検地帳と明治初年(不明?)の地籍図の地名を対比してみると検地帳にあるもの約八〇、地籍図のもの約一二二で二〇〇年間の変化を偲ぶことができる両方共通したもの約五八と約半数である。

法成寺という地名から有名な藤原道長の建立した法成寺に結びつけら

れているが、法成寺が法城寺と混同して使用されている事(福山志料・備陽六郡誌)や華榮物語に「摂政殿国々までできるべき公事をばさるもの

にして、先ずこの御堂の事を先に仕ふまつるべき信言い賜いて方四方を廻して大垣して瓦葺きたる……と記され更に小右記寛仁三年(一一〇一九)

七月一四日の条に「入道殿忽願、被奉造丈六金色阿弥陀仏十躰、四天王彼殿東地造十一間、可被安置、以受領一人充、一間可彼造云、從昨日始

本作、摂政不甘心云々……とあり国事をさしおいで国司一人に一間を割りあて、華麗を競わした堂であるが、同じ小右記の中に「天下の地悉く

一の家の領となり、公領は立錐の地もなきか」と歎いている時である。一寺毎に特別な荘園を設立したとは思えない。全国的にみても法成寺と

いう地名は少なく、時の権勢を誇った法成寺の荘園というものは考えられず小右記に記す如く天下大半の地が摂関家領であった事を思えば殊更

一寺の荘園を発想するのがむずかしい様に思われる。法成寺の地名が戦国期には出来ていた事は岡大附属図書館に平川範義(備中の豪族)旧蔵文

書に「今度於椋山法成寺兵部大夫雜意仕候処籠護相届申致御供無相違罷退候、忠節神妙候弥可抽忠功者也」

天文十(年欠)(一六世紀初)二月廿四日 実信(註)(平川)

内藤新右衛門尉殿(註)(神石豊松)

などによって知ることができる。法成寺は「放生会の行なわれた地」という高垣不敏氏の説も一概に捨てきれないのではないだろうか。

(天曆二年、九四八年という非常に縁起の古い当八幡の伝承についての

吉岡恒夫氏の説を参照させて頂きました。個々の小字の地名についての私見を述べましたので御批判を仰ぎたいと思います。

法成寺地区の地名

検地帳(元禄13年)にあるもの	地籍図にあるもの(明治年間)	地名の語源と考えられることから	検地帳(元禄13年)にあるもの	地籍図にあるもの(明治年間)	地名の語源と考えられることから
にこ谷	仁五谷	不明(古代軍団に関係ある語との説あり)		粟塚	(塚は古墳とは限らない)
	牧の本	牧場に関係あり(駅馬、伝馬の関係)	草広	草広	地形語(原と野は意味が異なる)
	大上	場所的地名か		原久保	
池平	池平	右に同じ字には正面傍らなどの意もある		原の前	
	近末	人名か		平の前	ひらには正面の意あり(城の正面の意あり)
かねつき	カ子ツキ	鐘撞免の地名は各地にあり	あけのたな	明ノ端	高い所(あげ)あく(湿地)谷間の小盆地
	池跡			石仏ノ向	
	角笠	笠は小高い地形(地形からきた坪割か)		東ウ子田	
	吉ヶ坪	古代条里制の名残り現在南北に流れる水路の間隔が大体一〇〇mあり坪の名残りを示す		カ子ガ久保	鉾山関係(当地では石切場が多いらしい)
	黒ヶ坪			ウ子田	小高く連る処(自然堤防を意味する)
もち田より沖	糯田	餅状の地、小盆地、(全国に多い)	白ノ谷	城ヶ谷	掛迫城の関係
	良	良神社の関係	掛迫	掛迫	カケはけわしいと言う意味
かど前	門前	神社、館、土居のまえ、佃田という地名あり	道城谷	道城	城への防禦施設が有ったと思われる
四日市	四日市	定期市(三斎市の名残)	こもがさこ	コモガ迫	まこも(植物)が生えていた所
とばから砂山道	鳥羽	ツバ(湿地の中の微高地の転化か)	大とうな向	大道奈	道(どう)はタオ、タワの転化)奈は土地(処)
鳥越	鳥越	通り越えの転(渡鳥の道の場合もあり)	小とうな向	小道奈	を表わす、穹状(アーチ型)の土地
	長石		岩明寺	岩明寺	

太郎二郎ヶ久保	宇多次郎久保	開発者の名か	岡本	岡本	自然地形(中心になる所が多い)
本谷	本谷	地形、土質か		竹ヶ端	塁館のある丘の端、高台の先端など
とばより砂山道	砂山			田中	居住状態(田の中)からの命名
宮のまわり	宮廻			茶ノ木畑(端)	
(井手迫)	井手ノ内		七反田	七反田	坪(一町歩)に足りない欠坪の田、あるいは共同開発で一人前の割当分の田、名田として一まとまりの田
神明	神名	神様の意(天照大神をさす事が多い)	五反田	五反田	
龍王面	龍王免	雨ごいの神を祀る為の免田		広岡	
	大塚		岡	岡	自然地形(中心になる所が多い)
身なげ	身なげ石	岩の形や地形からきた形容語		仲田	田の存在形態(囲まれた田)
さこ	サコ	小さな谷		田和	峠(タワ)の変化
馬場	馬場	お宮との関係	天王	天王	牛頭天王社のある所
	石鳥居			外五反	
二塚の町	二塚			新張	新開地(壘ハリ)
	畑田			古江木	小支谷、谷状の湿原
天田	天田	高い所の田、雨田、尼田などあり	もろ迫	迫	山で囲まれた小さい河谷の小盆地
良山	良山	良神社のある山		若宮	本宮の祭神の分霊を祀った宮
	下牧	牧場のあつた所とみてよい		亀原	亀は神に通ず、若宮と関連
上まき	上牧	(駅馬、伝馬の飼育、中世武士の馬)	はし原	羽子原	鳥もちで鳥を取る仕掛(ハガ、ハジと言う)
柚ノ木	柚杭			仁後	不明(前出)
上才ノ木		才は塞(村境)にあるしるしの木		西林坊	
たしまだ	田島田	(島状にポツンとある田か)		慶シン	
助迫	助迫	スキ(剥きか)両側が崖をなした谷		蓮当寺	
本辻	本辻	村の中心の辻	五輪谷	五輪峠	五輪塔があるのではないか
	赤子岩	赤子の足跡型のある岩(夜泣き止の信仰)	ゆきのぶ	行信(延)	新開者の名か

西山田	寄信	新開者の名か			
	行信新漕	(右記二件が中世名田でなく近世の者の証)			
	畑ケ田	前に同じ 村境の附近	大草	花免	稻積型の山をスズメ、又清水の転化か 寺、社の免田(蓮当寺の奥の院か)
	東才ノ木	前に同じ	大池平	大草	共同採草地か
	西才ノ木	畝田については前出	大池平	大久保	平は平地と言うよりも池に面したという意
藤の木	藤の木			坊寺獄	黄檗様(軍の神)を祭るか(城との関係 傍示(境の標をボウジという)村境の山
	せんなぎ		い里やう	井領	用水料の管理者又は其れを賄う土地
	西ウ子田	身近な動物なので各地にあり		友石	川の流れる音の擬音地名
	狸原	地形、状況からの地名		ドウドウ	
	飛渡り			中井手	
	油ケ迫			吹矢	金屬をふく(鑄物師、鍛冶屋か)矢は屋か
本谷	本谷	中心になる谷(地域的なもの)	池頭		
池ノ内	埋池ノ内	山姥などの伝説地が多い	もろ		
	乳母懐		ねびら		
広畑大塚	広畑		池ノ上		
にう道迫	入道ケ迫	開発者に関係か	郷蔵屋敷		
	木綿畑	戦国時代末期より栽培されているので、この 地方でも植えていたと思われる。(三河以西 に多い備後絆に關係あるかも)	勝負さこ		すえ(陶)免か
	全ノ平		すうめん		多くの場合水源、湧き水のある所を言う
	全ノ口		後茶湯山	茶堂山	
いやなぎ	井柳		とだ		湿田を意味する場合が多い
大谷	大谷	位置、大きさ、などから	東山田		
	カネイ久保	前出	池口		
	香合岩	ごつごつした巖しい岩(皇后島、庚午岩)	六反田		
西山田	西山田				

